

ESDの視点に立った高等学校家庭科の実践 — 島根県高等学校家庭科研究会出雲地区の取り組みから —

Practices of Education for Sustainable Development in Home Economics Education in High School : Report of Izumo Study Group in Shimane Prefecture

板持明子 遠藤聡子 植田勝子 中尾久美子 錦織教子 白根志保 澄川陽子 福田恵子
ITAMOCHI Akiko*, ENDO Satoko**, UEDA Katsuko***, NAKAO Kumiko**, NISHIKORI
Noriko****, SHIRANE Shiho*****, SUMIGAWA Yoko*****, FUKUDA Keiko*****

(*平田高等学校, **出雲農林高等学校, ***出雲高等学校, ****出雲工業高等学校,
*****出雲商業高等学校, *****(瀨摩高等学校, *****(鳥取大学)

キーワード: ESD education for sustainable development 家庭科教育 home economics education

I. はじめに

平成25～27年度、島根県高等学校家庭科研究会出雲地区では「ESDの視点に立った授業の工夫～地球規模で考え、体験的な学習を通して地域で学ぼう～」をテーマに実践研究に取り組んだ。ESDとは、環境的視点、経済的視点、社会・文化的視点から、より質の高い生活を次世代も含む全ての人々にもたらすことのできる開発や発展をめざした教育であり、持続可能な未来や社会の構築のために行動できる人の育成を目的としたものである。国立教育政策研究所が提案しているESDの視点に立った学習指導の目標としては、教科等の学習活動を進める中で「持続可能な社会づくりに関わる課題を見だし、それらを解決するために必要な能力や態度を身に付ける」としており¹⁾、特に生徒に身につけさせたい力として、従来の問題解決能力に加えて、問題を発見するだけでなく、物事を批判的にとらえ、多面的、総合的に考えるという能力を身につけることを求めている。このような批判的思考は、平成23～24年度に松江地区で行われた研究で、市民性の基盤として位置づけられ追究されたものであり、ESDにおける課題を発見する力につながっている。

本研究を進めるにあたり、出雲地区の高等学校教師を対象としたアンケート調査を実施した。その結果、教師のESDに関する理解は不足しており、持続可能な社会の創造を意識して行動したことがある者は1割程度にすぎなかった。これらの実態から、ESDに関わる授業研究においては、まずは教師自身の学習が必要であることが明らかとなった。

次に、持続可能な社会に関する生徒の意識および行動の実状を把握するため、生徒を対象としたアンケート調査を実施した。その結果から、例えば「フェアトレード」など中学校で学んだことのある生徒は約7割いたが、実際に商品を購入するといった行動を伴った生徒は約2割であったことなどから、認識と実際の行動に大きな開きがあることがわかった。「節電」については認識度も行動力も高かったが、節電を「温暖化防止」というように質問の角度が変わると、これらが頭の中でつながっていない生徒が多いことも明らかとなった。

そこで、出雲地区研究では、持続可能な社会を構築するためにどのような能力が必要であるか「身に付けたい力」について検討し、ESD実践を進めていくための枠組みを、構成概念・能力およびそれを実現するための方策にわけ、次のように設定した。本報告は、出雲地区のESD実践研究への取り組みとその成果についてまとめ、ESDという新たな家庭科教育の指導法への提言を行うことを目的とする。

■目的

- ・[構成概念] 持続可能な社会づくりに関わる課題を見つけようとする生徒を育成する
- ・[能力] 自分と地域・地球とのつながりを意識し、広い視野で他者と協力して行動しようとする生徒を育成する
- ・[方策] ESDを実践するための教材及び教科指導の方法を工夫する

■目指す生徒像

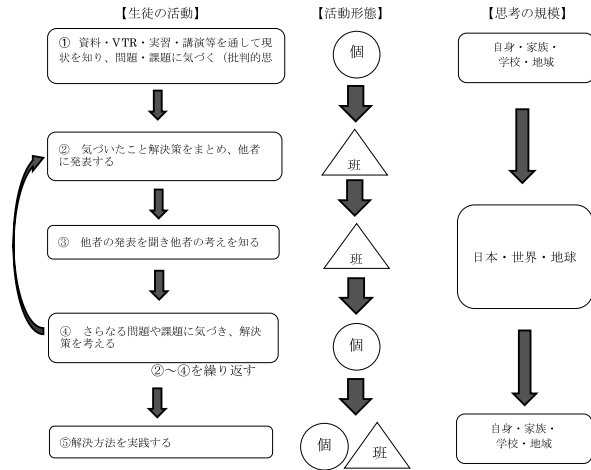
- ・身近な生活の中から課題を見つけることができ、自分のこととして解決しようとする生徒
- ・持続可能な社会の実現をめざし、自分と地域・地球とのつながりを意識して行動しようとする生徒

II. 研究の枠組み

1. ESD実践に向けた方策

国立教育政策研究所によるESDの視点に立った学習指導の目標の課題を5つの構成概念〔Ⅰ人間の尊厳、Ⅱ将来世代への責任、Ⅲ人間を取りまく自然との共存、Ⅳ経済的社会的公正、Ⅴ文化の多様性の尊重〕で捉え、必要な能力・態度—①批判的に考える力、②未来像を予測して計画を立てる力、③多面的・総合的に考える力、④コミュニケーションを行う力、⑤他者と協力する態度、⑥つながりを尊重する態度、⑦進んで参加する態度—を発展させた形で、「家庭科の授業の中で考えられる具体的事例」—環境問題、食生活問題、医療問題、経済格差、平和、貧困と人権、児童労働、フェアトレード、フードマイレージ、地産地消、リサイクル、グリーンコンシューマー、エコクッキング、食料生産、食品ロス、ゴミ問題、

資料1 ESDを取り上げた授業の進め方



資料2 「出雲地区版チェックシート」と授業者の展開例「調理実習」

【出雲地区チェックシート(ESDの視点表)】

構成概念	育てたい能力	ESDに関する						
		① 批判的 力 を 養 え る	② 未 来 を 計 画 し て 行 く 力 を 養 え る	③ 多 角 的 に 考 え 合 え る 力	④ コ ミュ ニ ケー ション 力	⑤ 他 者 と 協 働 す る 力	⑥ 自 ら の 責 任 を 負 い た り 得 る 力	⑦ 進 歩 し て い く 力
I 人間の尊厳			課題2		成果2			
II 将来世代への責任								
III 人間を取りまく自然との共存	成果1 課題1							
IV 経済的社会的公正								
V 文化の多様性の尊重								

【授業者によるESDの視点の違い】

【調理実習】	ESDの内容	時間数	学習内容	ESDに関する	
				構成概念	育てたい能力
授業者A	環境負荷の低減	3	エコクッキングについて考える	II・III	②④⑤
授業者B	食品ロス 環境負荷の低減	3	食料自給率の低下、食品ロスについて考える。 エコクッキングを実践する	II・III	②③⑤⑦
授業者C	食品ロス、環境負荷の低減	2	食品ロスについて考えたエコクッキングの実践	II	⑤⑦

エコキャップ、水、水道や井戸、地球温暖化、生活習慣病、異文化理解、森林保全などをあげた。これらの事例をテーマとして問題解決学習、課題解決学習、そして協同学習へつなげ、必要な能力・態度を育てることを目指した。この過程で各種教育資源をどのように活用できるかについて考えた。方策としては、1)問題解決学習の実施、2)体験学習・協同学習を通して考える学習活動、3)言語活動の工夫、を各校が共通して工夫することとして取り組んだ。各学校でのESDを取り入れた授業の進め方を資料1に示す。従来の問題解決学習を一つのテーマの中で繰り返し行うように心がけた。特に、協同学習を取り入れることに力を注ぎ、個人→集団[小規模(班)]→集団[全体(クラス、学校)]→個人といった活動形態になるよう工夫した。思考の規模についても、自分自身から、地域、世界へと規模を広げ、そして自分自身へフィードバックさせるように意識した。

また、国立教育政策研究所の中間報告・最終報告²⁾を参考

に、構成概念と育てたい能力についての「出雲地区版チェックシート」を作成した。授業者は、授業後に、このシート内に(ESDの視点を導入した成果)と(ESDを導入する際の課題)について書き込み、ESDの視点でこれまでの授業実践を検討し、新たな授業展開を試みた。資料2は、「出雲地区版チェックシート」と「調理実習」をテーマとした三名の授業者が授業を展開する上で特に重視した構成概念と育てたい能力を例として示したものである。授業者の思いにより育てたい能力や構成概念に違いが見られることがわかる。一つのテーマでも学びの選択肢は数多くあるため、教師同士が互いに情報を共有し、他者の視点を知ることにより個々の授業への振り返りとなったことは、とても効果的であった。

2. ESDを柱に学びを見通す「授業開き」

資料3は、一年間の授業の流れを把握し、ESDを柱とした家庭科の学習目標を明確にするための「授業開き」に関する学習指導案例〔家庭総合〕である。生徒に向けて、各校で授業開きを行う際に、ESDに関するオリエンテーションを各校で工夫して実施した。構成概念や育てたい能力については生徒が理解しやすいよう、「身につけたい持続可能な社会を作る力」として次の6項目—①物事の見通しを立てる力、②いろいろな立場や自然との関わりやつながりについて考える力、③なぜ? どうして?と疑問を持つこと(問題意識)、④コミュニケーション力、⑤自分の発言や行動に責任を持って進んで参加する力、⑥他者との協力—に言い換え、これらを目指していくことを伝えた。

一年間の授業のスタートにあたり、自分の生活がさまざまなシステムに支えられて成り立っていることに気づき、持続可能な社会を自分なりにイメージさせることは、その後のESD授業の展開上で必要不可欠なことであった。また、他者の視点に触れることをまず体験しておくことで、授業の中で生徒からの自由な発想や発言がある程度承認されるというメッセージとして働いたと考える。

III. 「家庭基礎」における授業実践報告

1. 中尾実践：いろいろな食品を選択する目を養おう(島根県立出雲農林高等学校)(資料4)

(1) 題材について

年度初めに「家庭基礎」の年間テーマとして「持続可能な社会」を掲げ、各題材において本当の意味での「幸せ」とは何か、繰り返し問いかけてきた。高校卒業後、消費者の一人として、まずは食品を選択する際の正しい情報を得ること、特に生産の背景にある問題点に気づくこと、そして情報の中から何を選んだらよいか考え行動すること、そして日々繰り返される一人一人の消費者の選択が社会を変え、それこそが「幸せな生活」、ひいては「持続可能な社会」につながることに気づくことを大きなねらいとした。

現代では、流通経路が複雑になり、多種多様な食品があふ

資料3 「授業開き」に関する学習指導案例〔家庭総合〕

1. 目標 一年間の授業の流れを把握し、家庭科の学習目標がわかる

2. 指導計画(2時間) 家庭科オリエンテーション

(1) 授業の目標

① 1年間の家庭科の授業を通して、人間の尊重、将来世代への責任、人間を取りまく自然との共存、経済的社会的公正、文化の多様性の尊重などをテーマに、持続可能な生活のあり方やそのために自分ができることについて考えていくことを知り、関心を持つ

② 1年間の家庭科の授業を通して、批判的に考える力、未来像を予測して計画を立てる力、多面的、総合的に考える力、コミュニケーションを行う力、他者と協力する態度、つながりを尊重する態度、進んで参加する態度などを、実際に体験しながら身につけていくことがわかる。批判的思考を体験し、多面的な考え方に関心を持つ

(2) 展開

	学習活動	教師の支援	ESDに関する評価	
			構成概念	育てたい能力
1 時 間 目 録 展 開 ①	1年間の授業の流れや、授業中のルールなどについて確認する	教員の自己紹介をし、授業当初から生徒が把握しておくべき事項を説明する	I 人間の尊厳 II 将来世代への責任 III 人間を取りまく自然との共存 IV 経済的社会的公正 V 文化の多様性の尊重	①批判的に考える力
	家庭科を学ぶ意味について、今までの学習体験をふり返って考える	中学時代の学習をふり返らせ、抽出して板書し、いくつかの項目に分類する		
2 時 間 目 録 展 開 ②	家庭科がよりよく「生きる」ために学ぶ教科であることを理解する	上記分類と英単語を通して「生きる」「人生」という言葉に導く		③多面的、総合的に考える力
	よりよく生きるために、まず自分や社会の生活を「これでいいのか」とふり返る	「これでいいのか」と問うことが、批判的思考であることを伝え、批判的な視点につながりやすい日常的な言葉で思考を促す		
展 開 ①	日常的で平易な例で、批判的思考を体験する	自由な発想を尊重することを伝える		
	クラス(学年)全体の批判的思考例を共有し、他者の視点を知る	クラス(学年)全体の批判的思考をまとめてプリントにし、他者の視点に触れさせる		
展 開 ②	今の自分の生活がこれからも続けられるのか、批判的視点で見直す	今のままでは不安だと感じていることを具体的に記入させる		
	「今のままでは不安だと感じていること」が、持続可能な社会を創るための視点の一部だとわかる	キーワードの確認を通し、自分の不安も含めて多くの問題があることを知らせる(不安については次時にプリントにまとめて共有させる)		
ま と め	持続可能な社会とはどのような社会か考える	持続可能な社会を言葉でイメージさせる(生徒の考えを記録に残し、今後の授業の中で取り上げていく)		
	これからの授業の中で、持続可能な社会のあり方を考えていくことを確認する			
一 年 間 の 授 業 の 流 れ や 教 科 の 特 徴 を 確 認 す る	一年間の授業の流れや教科の特徴を確認する			

(3) 評価規準

① 1年間の家庭科の授業を通して、人間の尊重、将来世代への責任、人間を取りまく自然との共存、経済的社会的公正、文化の多様性の尊重などをテーマに、持続可能な生活のあり方やそのために自分ができることについて考えていくことを知り、関心を持つ

評価の観点

おおむね満足できると判断される生徒の具体例	現在の自分の生活が様々なシステムに支えられて成り立っていることに気づき、持続可能な社会のあり方に関心を持つ
-----------------------	---

② 1年間の家庭科の授業を通して、批判的に考える力、未来像を予測して計画を立てる力、多面的、総合的に考える力、コミュニケーションを行う力、他者と協力する態度、つながりを尊重する態度、進んで参加する態度などを、実際に体験しながら身につけていくことがわかる。批判的思考を体験し、多面的な考え方に関心を持つ

評価の観点

おおむね満足できると判断される生徒の具体例	持続可能な社会を創るには様々な能力が必要であることがわかり、批判的視点でものを見たり、他者の視点を尊重する姿勢を持つ
-----------------------	--

れかえり、季節を問わず世界中から容易に食品を手にすることができ、「食生活」を取り巻く問題は、農業従事者の減少、食糧自給率の低下、食品の安全性、環境問題、食文化の伝承、生活習慣病等と多岐にわたっている。得られる情報は多いが、知らない情報も数多く存在し、例えば生産の背景にある問題点や、「誰が何をどうやってつくった食品か」という実態など、まずは正しい情報を知ることこそがよりよい食品を選択するための第一歩である。

高校生は、衣食住全般にわたって家族に依存することが多いため生活経験が乏しく、実際に食品を選択する機会さえ少ない。食品の背景にある環境、経済的社会的公正などの問題に気づくために「食品選択の基準」を題材とした。また生徒にとって身近な食品である「いちごジャム」は、主原料のいちごと砂糖の輸送による環境負荷や、生産者の労働力搾取などの問題が内在することから、「食品選択の基準」を考えるきっかけとして取り上げた。

資料4 中尾実践「いろいろな食品を選択する目を養おう」(島根県立出雲農林高等学校)

1. 題材 「さまざまな視点で食品を選択する目を養おう」
 家庭基礎 (2)生活の自立及び消費と環境 ア 食事と健康 (ア)養と食事 オ ライフスタイルと環境 (イ)環境負荷の少ない生活への取組

1. 題材目標

食品選択の基準が多様であり、経済的社会的公正の立場からの選択があることに気づくと共に、グループ学習、発表を通し食品を選択するという日常的な行動が持続可能な社会の実現につながっていることがわかる。

2. 基盤

①教材観

かつての日本社会では、農作物の生産、消費を一貫して行い、地域の人々がその地域の特産物や旬を味わい文化を尊重し、無駄を最小限にする工夫をしてきた。一方現代では、流通経路が複雑になり、多種多様な食品があふれかえり、季節を問わず世界中から安易に食品を手にすることができる。「食生活」を取り巻く問題は、農業従事者の減少、食糧自給率の低下、食品の安全性、環境問題、食文化の伝承、生活習慣病等多岐にわたっている。得られる情報は多いが、知らない情報も数多く存在し、例えば生産の背景にある問題点や、「誰が何をどうやってつくられた食品か」という実態など、まずは正しい情報を知ることこそがよりよい食品を選択するための第一歩である。高校生は、衣食住全般にわたって家族に依存することが多いため生活経験が乏しく、実際に食品を選択する機会さえ少ない。年度初めに「家庭基礎」の年間テーマとして「持続可能な社会」を掲げ、各題材において本当の意味での「幸せ」とは何か、繰り返し問いかけてきた。高校卒業後、消費者の一人として、まずは食品選択の際の正しい情報を得ること、特に生産の背景にある問題点に気づかせたい。そして情報の中から何を選んだらよいか考え行動すること、そして日々繰り返される一人一人の消費者の選択が社会を変え、それこそが「幸せな生活」、ひいては「持続可能な社会」につながることに気づくことを大きなねらいとしている。食品の背景にある環境、経済的社会的公正などの問題に気づくために「食品選択の基準」を教材とした。また生徒にとって身近な食品である「いちごジャム」は、主原料のいちご砂糖の、輸送による環境負荷や、生産者の労働力搾取などの問題が内在することから、「食品選択の基準」を考えるきっかけとして取り上げたい。

②生徒観

本校生徒は、日常生活の中で掃除、洗濯、炊事等家事労働の手伝いをしているものも多く、実際に夏期休業中の課題「家族のために料理を作ろう」を実施した際にも、料理に用いる食品の購入を経験している生徒も多数いた。また農業を志し本校に入学し、実際に総合実習という専門科目で農作物の栽培、収穫、販売の経験を経て、「消費者」という立場だけでなく「生産者」としての意識を少しずつ持ち始めている。本授業をきっかけに卒業後、自立した社会人として、本テーマである「食品の選択」だけではなく、日常生活全般においてさまざまな視点を持ち自らの意志で選択できる生徒を育てていきたい。本クラスには、明るく活発な生徒、まじめで優しい生徒さまざまな生徒がいるが、クラス全体として、どのような題材に対しても意欲的に取り組む雰囲気がある。また学習能力も高く、各課題や定期試験等に対しコツコツと一生懸命取り組み、充分に成果が表れている。中には発言や発表に自信のない生徒、コミュニケーションを苦手とする生徒もいるが、進行、記録、発表それぞれの役割を通して、生徒一人一人が個性を発揮し、自信を持って生き生きと授業に取り組める授業を展開したい。4月当初より、グループ学習、発表会等を通じて、クラスの生徒同士が安心して自分の意見を発言し、思いやりを持って、互いの意見を認め合う授業作りを重視してきた。また教材や授業の導入を工夫し、一時間の授業に一つ以上の「気づき」のある授業作りを心がけてきた。家庭科の授業は実習が多く少人数指導が有効であることから、通常の授業はクラスを半分ずつに分け、異なる領域を2名の教員で同時進行し成果を上げている。しかし、本授業のねらいが「さまざまな視点」に気づき、「食品選択の基準」について考えることにあるため、あえて40人、8グループでの授業形態が最適であると考えた。

③指導観

広い視野でものを見ることが出来る生徒を育てるために、まず「なぜ?どうして?」と問題意識を持って自分自身で考えること、自分の意見を自分の言葉で他者に伝えること、他者の意見を取り入れながら再考しさらに他者と共有しようという「サンドイッチ方式」による協同学習を取り入れることにした。また、「食品選択の基準」について「サンドイッチ方式」の前後に、「ダイヤモンドランキング」をグループ学習で行うことにより、自分だけでは気づけなかった「さまざまな視点」に気づき、学習の過程で得られた思考の広がりや深まりを、生徒自身が視覚的に確認できるようにした。

教材として取り上げたい「いちごジャム」は、本校食品科学科2、3年生が総合実習の授業で製造、販売しており、本クラスの生徒も製造過程を「生産者」として経験したことがある親しみのある加工食品である。さらに事前に各班に「いちごジャムを選択し購入する」という課題を出すことにより「消費者」として食品選択の視野を広げる体験もしている。このように「生産者」と「消費者」の双方の立場の体験をすることで、生徒達は、多面的、総合的に「食品の選択基準」を考えることができると考える。

4月当初、年間テーマである「持続可能な社会」を考えるきっかけとして、「自分にとって幸せとは何か?」「自分にとって幸せになるために大切なこと?」をイメージし「幸せになるために大切なこと?」を地球の写真上に示す学習をしている。本授業を通して、一人ひとりの日常の行動の積み重ねが「自分にとっても他の人にとっても幸せな社会」、そして「持続可能な社会」につながっていることに気づかせたい。

3. 指導と評価の計画

(1)ねらい

- ①食品選択の基準が多様であること、経済的社会的公正の立場からの選択があることを理解できる。
 (Ⅰ 人権の尊重 Ⅱ 将来世代の責任 Ⅳ 経済的社会的公正)
- ②食品の選択基準について、自分なりの選択方法をグループ学習、発表を通し多面的、総合的に考えることができる。
 (①批判的に考える力 ③多面的、総合的に考える力 ④コミュニケーションを行う力 ⑥つながりを尊重する態度)

(2)展開(3時間分)

	学習活動	学習形態	教師の支援	ESDIに関する評価	
				構成概念	育てたい能力
1時間目	・「いちごジャムの選択の基準」について、プリントに記入する。 ・「食品を選択する際の条件」について、グループで話し合い、画用紙にまとめる。 ・班の代表者が発表する。 ・発表を聞く。	個人 班 全体	・「いちごジャムの選択基準」を考えさせることを伝える。 ・「ダイヤモンドランキング」の手法で優先順位を考えさせる。 ・全員に役割を与える。 ・机間指導をし、グループでの話し合いがスムーズに進むようアドバイスする。 ・最優先にした条件について理由を考え、発表させる。 ・人により「食品選択に基準」に違いがあることに気づかせる。 ・「産地」に注目させ、次時の授業につなげる。		①批判的に考える力 ④コミュニケーションを行う力
2時間目	・2種類のいちごジャムについてプリントに記入する。 ・資料を読んで日本の砂糖の輸入の現状について理解する。 ・「サトウキビ」の生産現場について知る。 ・感想をプリントに記入する。(プリント③) ・資料を読んで児童労働の実態について理解する。(プリント⑥)	個人 全体 個人 全体	・プリントに記入することで、ジャムに関する情報を整理させる。 ・「いちごの産地」に注目させ、輸送距離がかかるほど、環境に負荷を与えることに気づかせる。 ・いちごジャムの環境負荷を考える際に、「いちご」だけではなく「砂糖の産地」についても気づかせる。 ・資料「砂糖の生産トップと日本の輸入先」を読んで、砂糖の9割以上が輸入にたよっていること、また輸入先について確認させる。 ・資料「輸入食品の(フード)マイルージ」を読んで、諸外国と比較し、「日本人の一人あたりの輸入食品のマイルージ」が高いことに気づかせる。 ・「サトウキビ」の生産現場について知らせる。 ・2種の映像を比較することにより、ジャムに使用されている砂糖の背景に「児童労働」の可能性のあることに気づかせる。 (映像「サトウキビ産業によって破壊されたカンボジアの村」Gurdian Investigationsより、「種子島の農業:大型ハーベストによるサトウキビの収穫作業」H. P. ふるさと種子島より) ・資料「アフリカの子どもの児童労働の実態」、「世界各地で報告されている児童労働と産業」を説明する。	Ⅱ 将来世代への責任 Ⅳ 経済的社会的公正 Ⅰ 人間の尊厳	⑥つながりを尊重する態度

3 時 間 目	展開 ③	<ul style="list-style-type: none"> ・前時、前々時を振りかえる。 ・いちご、砂糖の産地、輸送距離について発表する。 ・感想を発表する。 ・いちごジャムの選択基準についてグループで話しあい、画用紙にまとめる。 ・購入した2種類の「いちごジャム」の写真を、作成したランキング表にのせる。 ・発表する。(2班) ・発表を聞く。 ・人権・環境に配慮したジャムについて知る。 	<p>全体</p> <ul style="list-style-type: none"> ・事前課題(グループでいちごジャムを2つ選択し購入する)で購入したいいちごジャムを机上に置き、比較させることにより、本時の学習への意欲・関心を高めさせる。 ・いちご、砂糖の「産地」によって、輸送距離が異なり、輸送距離がかかるほど、環境に負荷を与えることを確認させる。 <p>全体</p> <ul style="list-style-type: none"> ・映像「サトウキビ産業によって破壊されたカンボジアの村」の感想を数名に発表させ、ジャムに使用されている砂糖の背景に「児童労働」の可能性のあることを確認させる。 <p>班</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループ学習をするにあたって、役割分担、話し合いのルール(全員が必ず発言し、発言内容について認め、否定しないこと)、流れを確認する。 ・これまでの学習内容(人権・環境)をふまえた「新しい視点」を取り入れた上で、「ダイヤモンドランキング」の手法で優先順位を考えさせる。 ・グループでの話し合いがスムーズに進むように机間指導を行う。 ・各班が事前課題として購入した2種の「いちごジャム」を活用する。 <p>全体</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本時、前々時に各グループでまとめた画用紙1枚を比較させ、変化のあった部分に注目させる。 ・各グループが購入したジャム他の中から「人権・環境」に配慮したジャムを紹介する。 (「長崎県産さちのか使用」、「静岡県産あきひめ使用」、「静岡県産紅ほっぺ使用」、「青森県産いちご使用」 「砂糖不使用、果汁使用」、「静岡県産あきひめ使用、北海道産砂糖」 「出雲農林高校のマーマレード(大社産みかん使用)」) 	<p>II 将来世代への責任</p> <p>I 人間の尊厳</p> <p>④コミュニケーションを行う力</p> <p>⑥つながりを尊重する態度</p>
	ま と め	<ul style="list-style-type: none"> ・日常の行動が「持続可能な社会」が繋がっていることに、改めて気づく。 ・「持続可能な社会」の実現にむけて、できることを考える。 	<p>個人</p> <ul style="list-style-type: none"> ・4月当初に学んだ内容について振りかえらせ、私たちの一つ一つの行動が「持続可能な社会」につながっていることに気づかせる。 ・食品を選択する際に、さまざまな視点があり、個人の欲求を満たすだけでなく、生産者の生活を考えること、環境の負荷に影響を与えること、経済の主体であることを考えることが大切であることに気づかせる。 ・出雲農林高校の生徒として、自分たちにできることを考え、プリントに記入させる。 	<p>IV 経済的社会的公正</p> <p>③多面的、総合的に考える力</p>

(3) 評価規準

①食品選択の基準が多様であること、経済的社会的公正の立場からの選択があること理解できる。

おおむね満足できると判断される生徒の具体例	食品の選択基準の一つとして、人権、環境に関わる視点があることに気づく。
②食品の選択基準について、自分なりの選択方法をグループ学習、発表を通し多面的、総合的に考えることができる。	
おおむね満足できると判断される生徒の具体例	食品の生産にある様々な問題に気づき、グループ学習を通して他者の異なる視点にふれ、自分なりに「食品の選択基準」について考えることができる。

(2) 学習状況および成果

1) 評価規準①「食品選択の基準が多様であること、経済的社会的公正の立場からの選択があることを理解できる」について

おおむね満足できる生徒の具体例として「食品の選択基準の一つとして、人権、環境に関わる視点があることに気づく。」をあげたが、おおむね達成できた。教材として取り上げたいいちごジャムは、本校食品科学科2、3年生が総合実習の授業で製造、販売しており、本クラスの生徒も製造過程を「生産者」として経験したことがある親しみのある加工食品である。さらに、事前に各班に「いちごジャムを選択し購入する」という課題を出すことにより「消費者」として食品選択の視野を広げる体験もしている。「生産者」と「消費者」の双方の立場の体験をすることで、生徒達は、多面的、総合的に「食品の選択基準」を考えることができる。

問題意識を持って自分自身で考えること、自分の意見を自分の言葉で他者に伝えること、他者の意見を取り入れながら、さらに他者と共有しようという協同学習を取り入れることで広い視野でものを見ることができた。また、「食品選択の基準」について「ダイヤモンドランキング」をグループ学習で行う

(写真1) ことにより、自分だけでは気づけなかった「さまざまな視点」に気づき、学習の過程で得られた思考の広がりや深まりを、生徒自身が視覚的に確認できた。例えば、ジャムの選択基準の第一基準として「値段」から「原材料」に変化している班があった。理由として「生産者のこだわりがまっているから、授業でフードマイレージについて学んだから」とあげていた。また「原産地」「砂糖不使用」「輸送距離」など学習前にはなかった基準も多く見られた。また授業後、DVD『もったいない!ばあさんと考える世界のこと』の視聴を通して、異常気象、戦争、難民、貧困等、地球で起きているさまざまな問題について発展させ、地球規模で起きている問題を自分の現在の暮らしと結びつけ、「高校生の今自分に何ができるか」について考えさせた。

2) 評価規準②「食品の選択基準について、自分なりの選択方法をグループ学習、発表を通し多面的、総合的に考えることができる」について

おおむね満足できる生徒の具体例として「食品の生産にあるさまざまな問題に気づき、グループ学習を通して他者の異なる視点にふれ、自分なりに「食品の選択基準」について考えることができる。」をあげたが、おおむね達成できた。4月



写真1 グループ学習の様子（出雲農林高等学校）

当初より、グループ学習、発表会等を通じて、クラスの生徒同士が安心して自分の意見を発言し、思いやりを持って、互いの意見を認め合う授業づくりを重視してきた。明るく活発な生徒、まじめで優しい生徒さまざまな生徒がいる中で、発言や発表に自信のない生徒、コミュニケーションを苦手とする生徒もいるが、進行、記録、発表と全員に役割があることで、生徒一人一人が個性を發揮し、意欲的にグループ学習に取り組み、まとめた内容を堂々と自信を持って成果を発表することができた。授業後のまとめとして、事前に各班が購入した2種と教材としてとりあげた2種の計4種のジャムを試食して、最終的に個人で食品選択の基準を考えさせた。授業の流れと共に、グループ学習、個人を通して変化していく選択基準（とその理由）が興味深い。

(3) 残された課題

本授業を受けた生徒が、卒業後、自立した社会人として、本テーマである「食品の選択」だけではなく、日常生活全般において、問題意識と共にさまざまな視点を持ち、自らの意志で選択できるようになることが課題である。日々新聞、ニュース等で見聞きする問題について、まずは関心を持ち事実を知ること。そして決して他人事ではなく自分の問題としてとらえ、自分に何ができるか考えて欲しい。小さく思われることでも自ら行動に移そうとまずは努力して欲しい。また、何かを選択する際に、自分だけの意見だけではなく、確かな情報を収集し、他の意見も取り入れ、最終的に自分の判断で答えを見つけようと努力してほしい。

4月当初、年間テーマである「持続可能な社会」を考えるきっかけとして、「自分にとって幸せとは何か？」をイメージし「幸せになるために大切なこと」を地球の写真上に示す学習をしている。一人一人の何気ない日常の行動の積み重ねが「自分にとっても他の人にとっても幸せな社会」、そして「持続可能な社会」につながっていることを意識できる生徒を育てたい。そのために「家庭基礎」の他の領域でも常に意識しながら授業を展開していきたい。

2. 植田実践：食品ロスの削減に向けて社会に提言しよう（鳥根県立出雲高等学校）（資料5）

(1) 題材について

「持続可能な社会」を構築していくことは、持続不可能な社会をつくりだした私たちの日常生活を作りかえることである。出雲地区で設定した目指す生徒の育成を目標に、ESDの視点に立った学習指導を実践した。家庭基礎の授業を通して、「私たちにできることは何か考えよう」をテーマに取り組んだ。

生徒たちは生活全般を親に依存しており、「身近な生活の中から課題をみつける」ためには、イメージしやすい食生活が適していると考えた。生徒たちは「環境に配慮した生活」についてしっかりと教育を受けてきている世代であり、環境に配慮した食生活の重要性は理解している。しかし、その言動からは危機感もそれほど感じられず、自分や家族の生活が社会で起こっているさまざまな問題とつながっていない様子がうかがえた。最も身近であろう食生活の「食べる」ことの背景に何があるのか。普段あまり意識していないことへの思考を深めることから始めることとした。食品ロスの学習を通して、自分たちが送る食生活が身近であるいは世界でどのような状況を作り出しているか、思考を深め「自分のこととして解決する」ために、生徒たちが相互に意見を言い合える場面も多く取り入れた。協同学習を通して食品ロスが引き起こす問題点や背景を自分たちの課題として捉えることで、自分たちにできる改善策を具体的に考えさせた。食品ロスが生じる背景や原因について多面的、総合的に捉えた意見を整理し、それぞれの改善策を考えてまとめることで、生徒は自分たちの行動と社会のつながりを目で見て確認し、意識できると考える。そして、最後に解決策を人の心を動かし行動を促すような提言にまとめさせた。他者へ伝えるという行動が、逆に生徒の自覚を促すためには最も有効な方法だと考え、生徒たちが知識の習得のみにとどまることなく提言を発信することで、主体的な態度の育成を図ることをねらいとして取り上げた。

(2) 学習状況および成果

1) 評価規準①「食品ロスについて理解し、食品ロスを減らすための改善策を考えることができる」について

おおむね満足できる生徒の具体例として「食品ロスについて思考を深め、食品ロスを減らすための改善策等を積極的に考えている。」をあげたが、おおむね達成できた。

はじめに、生徒たちはウェビングマップの作成を通して活発に意見交換をしながら、食品ロスから生じる問題点が多岐にわたっていることに気づくことができた。それによって食品ロスがいかに重要な課題であり、自分たちが持っている意識を変え、解決に向けた取り組みが急務であることも理解できたようである。改善策については、自治体や企業ですでに実践されているさまざまな取り組みについて調べ、自分たちの生活の中にどのようにそれらを取り入れることができるか考えていた。

意見交換を進めるうちに「誰に向けた改善策にするか」といった対象を具体化する班もみられた。「賞味期限カレンダー

資料5 植田実践「食品ロスの削減に向けて社会に提言しよう」(島根県立出雲高等学校)

1. 題材の目標

「食品ロス」をテーマに物事を多面的、総合的に考え、他者とコミュニケーションを図りながら解決策を考え社会へ提言するという行動を通して主体的に持続可能な社会の実現に向けた生活を営むことができるようにする。

2. 学習の基盤

(1)教材観

日本を含む先進国では豊かな食生活を送るために様々な食品を外国から輸入しながら、それらの食料を多く廃棄することが恒常化している。そして、それが環境に負荷をかけていることをはじめ、様々な問題につながっていると意識されることは少ない。

さらに高校生は食生活をはじめ生活全般を親に依存しており、本校での食生活チェックを見ても食品の購入や保存、調理について主体的に関わることが少ないことが分かった。高校生の食生活は「食べる」ことが中心で関心もあるが、「その背景に何があるか」について気付くことはほとんどない。

国連は、世界では今後途上国を中心に人口爆発が予想され、2050年までに食料生産量を70%増やさなければならないと示している。高校生が生きていく社会はこのままだけは持続不可能な社会となりかねない。持続可能な社会を創るためには、自ら進んで行動を起こす必要があることを理解させたい。

食品ロスは食べ残しや過剰除去など、高校生にも身近な課題から入っていくことができる教材である。そして食品の生産から廃棄までの一連の流れの中で浮かび上がっている問題を見つけ、その問題の背景や原因・解決方法を探ることで「私たち消費者が負うべき将来世代への責任」を多面的、総合的に考えさせることができる。生徒たち自身に今ある社会の現状について正しく理解させ、「これは自分たちの問題だ」という意識を持たせることができると考える。

(2)生徒観

本校生徒は学習意欲が高く、家庭科においても「将来役に立つ教科」との認識で意欲的に取り組んでいる。しかし知識や技術が習得にとどまり、実生活に照らし合わせてそれらをどのように活用したらよいか思考、判断し、実践する力に結びついていない状況がみられる。「環境に配慮した生活」についても生徒たちはしっかりと教育を受けてきている世代であり、地球温暖化が進み海面が上昇すると真っ先に沈む国などは即座に答えられる。夏休み課題「ホームプロジェクト～食と環境～」でも食品ロスやフードマイレージをテーマに取り組んだ生徒は多く、環境に配慮した食生活の重要性は理解しているようである。しかし生徒たちの感想からは問題意識の高まりはそれほど感じられず、自分や家族の生活が社会で起こっている様々な問題とつながっていない様子がうかがえた。そのためホームプロジェクトでの実践がその後の実際の行動に結びついていく生徒は少なく、今まで学習してきた環境教育も知識の習得にとどまっているのが現状である。

(3)指導観

まず生徒たちに「私たち消費者が負うべき将来世代への責任」に気付かせなければならない。そのためには生徒たちが今ある社会の現状について正しく理解し問題意識を持つことが必要である。そこでウェビングマップ作成により食品ロスから派生する様々な問題をグループで考えさせたい。この方法は食品ロスが様々な問題点につながっていることを目に見て追っていくことができ、さらにその問題が深刻であり解決が急務であることに気づかせるために有効であると考えられる。さらにKJ法により食品ロスが生じる背景や原因について多面的・総合的に捉えた意見を整理し、それぞれの解決策を考えてまとめることで、生徒は自分たちの行動と社会のつながりを目に見て確認し、意識できると考える。そして最後に解決策を人の心を動かす行動を促すような提言にまとめさせる。ポスターを用いて提言するためには他者の関心をポスターに向けさせる必要があり、いかに正確な情報を元にしなければならないか、人に伝えるためどのような視点でどのような言葉を用いて表現するのが最も効果的かなど思考を深めさせることができる。ラーニングピラミッドでも「他の人に教える」ことが圧倒的に学習定着率を高めるとされており、他者へ伝えるという行動が逆に生徒の自覚を促すためには最も有効な方法だと考える。ポスターセッションの手法を用いて発表することで、発表者が質問に答えたり補足的な情報を提供したりしながら、視聴者は質問やアドバイスをすることで他者と協力して課題を解決する態度の育成が期待できる。生徒たちが知識の習得のみにとどまることなく提言を発信することで主体的な態度の育成を図りたい。

3. 指導と評価の計画(総授業時数5時間)

(1)ねらい

- 食品ロスについて理解し、食品ロスを減らすための解決策を考えることができる。
(構成概念:Ⅲ人間を取りまく自然との共存、Ⅱ将来世代への責任)
- 物事を多面的、総合的に考え、他者とコミュニケーションを図りながら解決策を考えることができる。
(育てたい能力:③多面的、総合的に考える力、④コミュニケーションを行う力、⑤他者と協力する態度、⑦進んで参加する態度)

(2)展開(総授業時数5時間)

	学習活動	学習形態	教師の支援	ESDに関する評価	
				構成概念	育てたい能力
1時間目	<p>この写真を見て、考えよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 食堂のごみ箱、コンビニエンスストアの廃棄物、アフリカの子どもの写真を見て、日本の食生活の問題点を考える。毎日みんなでおにぎり2個を〇〇! ・ おにぎりを捨てるのをイメージすることで、日本では毎日どれくらいの食品が廃棄されているか気づく。 	個 全	<ul style="list-style-type: none"> ・ 写真から日本の食生活は豊かであるが問題もあることに気づかせる。 ・ おにぎり2個分の重さから、毎日廃棄される食品の量の多さに気づかせる。 ・ 資料により日本の食品ロスの数値的な現状を説明する 	Ⅲ人間を取りまく自然との共存	Ⅱ将来世代への責任
	<p>食品ロスの何が問題?</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 食品ロスによって生じる問題にはどのようなものがあるか考える。 ・ 各班でウェビングマップの作成を通し、食品ロスから生じる問題点を洗い出す。 ・ 特に重要な問題は何か班で考える。 ・ 班で追求する問題を決める。 ・ DVD「食料廃棄、環境への影響」を視聴し、問題の深刻な状況をイメージする。 	個 班 班 全	<ul style="list-style-type: none"> ・ ウェビングマップを作りながら意見交換することで食品ロスから生じる問題が多い実態に気づかせる。 ・ 思考が深まるよう机間指導をし、必要に応じて助言する。 ・ 追及する問題点を各班で決めさせる。 ・ 生徒が気づきにくいポイントをDVDで視聴させる。 	③多面的、総合的に考える力 ・ 食品ロスが生じる原因や背景を多面的に考えている。 ④コミュニケーションを行う力 ・ 活発に意見を出し合い、より良い意見へと調整している。	

2 時間目	展 開 ②	食品ロスによって生じる問題点の現状を知ろう ・前時で決めた問題点の現状についてインターネット等から情報収集し、整理する。 (パソコン教室)	班	・具体的な情報収集をすることで食品ロスによって生じる深刻な問題を生徒たち自身に気づかせる。 ・提言に必要な情報を整理しやすいプリントを用意する。		⑤他者と協力する態度 ・グループで話し合いながら必要な情報の精選をしている。
3 時間目	展 開 ③	私たちの提言～食品を無駄なく使うために何ができるか～ ・KJ法を用いて原因や背景について情報を整理する。 ①食品ロスが生じる原因や背景は何か ②私たちにできる解決策 ・提言テーマを決定する。	班 班	・原因や背景をグルーピングしながら模造紙に付せんを貼るよう指示する。 ・グルーピングしたところに解決策を書き込み整理するよう指示する。		③多面的、総合的に考える力 ・解決策について様々な場面や方法を想定して考えている。 ④コミュニケーションを行う力 ・活発に意見を出し合い、より良い意見へと調整している。
4 時間目	展 開 ④	私たちの提言～食品を無駄なく使うために何ができるか～ ・提言内容の適切な表現方法について考える。 ・聞き手の実質的行動を促すために、どの情報を活用するか話し合いを通して考える。 ・聞き手の実質的行動を促す表現方法について考える。	班 班 班	・自分たちの発表が人の心を動かし、実質的行動を促すような内容になるよう助言する。		④コミュニケーションを行う力 ・提言テーマを聞き手の心を動かすことができるよう表現方法について意見を出し合っている。
5 時間目	展 開 ⑤	提言テーマについて発表する ・本時の発表方法について確認する。 <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px 0;">ポスターセッションで意見交換し、提言がより良いものになるように考える</div> 【発表 2分】 【質疑 2分】 【評価記入 1分】計5分間 ・発表をする。(聴衆は各班と異なるテーマを優先的に聴く) ・聞き手の実質的行動を促せるよう、工夫して発表する。 ・聞いた人は、アドバイスカードに記入、発表者に渡す。	全 全 班 個	・ポスターセッションでの活発な意見交換のため、発表者には質問に十分答えられるよう発表内容を再確認させておく。 ・視聴者には確実に質問できるよう事前に質問者を決めさせておく。 ・アドバイスカードを記入することで、提言をより良くする自分の意見を考えさせる。	Ⅲ人間を取りまく自然との共存 Ⅱ将来世代への責任	④コミュニケーションを行う力 ・相手にわかりやすく発表できた。
	まとめ	・本時の学習を振り返り、まとめプリントを記入する。	個	・私たちの毎日の食生活は多様な事象とつながり合う活動であり、それを意識して生活することがこれから求められる態度であることを伝える。		⑦進んで参加する態度 ・提言を家庭生活の中で活かそうとしている。

(3) 評価規準

- ① 食品ロスについて理解し、食品ロスを減らすための解決策を考えることができる。

評価の観点

おおむね満足できると判断される生徒の具体例	食品ロスについて思考を深め、食品ロスを減らすための解決策等を積極的に考えている。
-----------------------	--

- ② 物事を多面的、総合的に考え、他者とコミュニケーションを図りながら解決策を考えることができる。

評価の観点

おおむね満足できると判断される生徒の具体例	物事を多面的、総合的に考え、他者とコミュニケーションを図りながら解決策や提言を考えようとする姿勢が見られる。
-----------------------	--



写真2 ポスター発表の様子（出雲高等学校）

を使いませんか」、 「無駄づかいやめませんか〜ノートを作ろう〜」を提言した班は、それぞれカレンダー、ノートを作成し、校内では教職員に、家庭クラブ研究発表大会では参加者に配布した。また、もっと多くの人に「食品ロスの重要性を訴えたい」と考えた新聞部の生徒は、「食品ロスについて」としてシリーズ化し連載を続けている。「市の広報に食品ロスについて掲載してもらおう」ことを考えた班は、広報には載せることはできなかったため、現在別の方法を検討中である。

2) 評価規準②「物事を多面的、総合的に考え、他者とコミュニケーションを図りながら解決策を考えることができる」について

おおむね満足できる生徒の具体例として「物事を多面的、総合的に考え、他者とコミュニケーションを図りながら解決策や提言を考えようとする姿勢がみられる。」をあげたが、おおむね達成できた。

ウェビングマップの作成を通して、食品ロスから生じる問題点を、環境面、経済面、人道的視点などさまざまな視点から考え、意見交換ができた。各クラスでポスターセッションを用いて提言発表会を実施し、全員が提言者として「いかに相手の心に訴えかけるか」構想を立てて、自分たちの考えを他者へ提言した。中には鋭い質問をする生徒もいて、発表者がたじろぐ場面やしっかり答える場面などが見られた。発表者は聞いた人から「アドバイスカード」を受け取り、次の時間に他の班から出た質問やカードを基に、さらに提言の練り直しをした。どのように作り直せばより相手の心を動かすことができるか、各班とも活発に意見交換しながらポスターを作り直す様子が見られた。

(3) 残された課題

今回の授業を通して、生徒たちも普段あまり意識することなく送っている自分たちの日常生活が、どのような影響を持つものなのか気付くことができた。しかし、これが一時のことではなく生徒たちの意識の中に根付くものとならなければならない。また「持続可能な社会」を構築していくためには食品ロス以外の解決していかなければならない問題も山積である。そのためには生徒たちの意識も「持続可能」でなければ

このESDの取り組みは意味をなさなくなってしまう。今後の授業を通してさらに「持続可能な社会」のために「私たちにできることは何か考えよう」を継続していかなければならないと考える。

IV. まとめに代えて

ー授業実践からESDの指導法を読み解くー

私たちの生活は、自然環境や政治、経済、文化、社会のシステムの中で、地域や国を超えた人々の生活と密接に関わり合って成り立っている。家庭科におけるESDは、私たち一人一人が、このような関わりの中で生きていることを認識し、次世代を含めて地球上の持続可能な未来を築く価値観や行動、ライフスタイルを培うことをめざしている。ESDは決して新しい課題ではなく、生活を見つめ、問い直し、実践する力を育んできた家庭科において、これまでも意識されてきた教育課題である。出雲地区研究は、これまでの実践をESDの視点で見つめ直したものであったといえよう。ここでは、前に紹介した2つの授業実践のもつそれぞれの意義について考察し、ESDの効果的な指導法についてまとめた。

1. 中尾実践：ESDの基盤となる学びをつくる

中尾実践で着目したい観点は、資料4に示す学習指導案の「基盤」部分に記述されている事柄である。「持続的な社会を築く」を生徒の身近な問題として具体化できなければ、観念的な理解にとどまった授業内での知識に終わる可能性が大きい。また、国立教育政策研究所より示された5つの構成概念も抽象的なものであり、それらをいかに具体的に捉え直すかは現場教師に委ねられた課題である。中尾実践は、生徒一人一人を「ESDをふまえた学びの主体」として位置づける実践、換言すれば、ESDの土台づくりに重点を置いた実践といえる。そのことは、「基盤」において、4月当初より、持続可能な社会を考えるきっかけとして「自分にとって幸せとは何か?」を繰り返し問いかけ、一人一人の日常の行動の積み重ねが「自分にとっても他の人にとっても幸せな社会」につながることを意識させている。それは、クラスの集団づくりにも活かされている。「生徒個々が役割をもち、その個性を發揮し、自信をもって生き生きと授業に取り組める」ことが目指され、さらに、「生徒同士が安心して自分の意見を発言し、思いやりを持って、互いの意見を認め合う授業づくり」が重視され、生徒それぞれが力を發揮できるよう力が注がれている。協同的な学びがコミュニケーション力や他者と協力する力を育てる上で、また、思考の整理や深化・発展に効果的であることは知られているが、その効果は、中尾実践のような生徒同士の良好な関係性の上に期待できるものである。そして、一人一人が認められ自己を發揮できる集団を経験し、そのような態度や能力を身につけることは、まさに社会において多様な他者とともに生きるための関係性に関する学びであり、ESDで目指す態度や能力そのものである。ESDといえ、取り上げ

る内容が意識されがちであるが、充実した学びであるためには、教材研究と同時に、クラス集団のなかで生徒一人一人が生き生きと力を発揮できる集団づくりを意識する必要がある。

2. 植田実践：社会につながり社会を動かす学びをつくる

持続可能な社会づくりのためには、知識が認識レベルにとどまることなく、日常の行動に結びついていく必要がある。学校でのESDにおいては、まず、知識を獲得し、知識と知識を生徒自身が思考しながらつなぎ合わせ、その知識でもって生活事象を多面的に捉えて本質を見抜くという第一のプロセスを経て、主体的かつ社会的な意思決定をふまえて実際の行動として社会参画し、それらを省察するといった第二のプロセスに至る取り組みが求められる。往々にして第一のプロセスで学びを終了せざるを得ない場合も多かろうが、実際に自分たちの得た学びを社会に発信し、社会を変えようとする第二のプロセスでの体験的な学びでは、学校での学びと社会とのつながりを実感をもって理解できるとともに、自分がその主体であることの実感、さらには、社会的なリターンが返ってくることで、生徒自身が学びを客観的に見つめ直すこともできる。社会からの評価は、学びを好意的に評価し支援するものばかりでなく、思考の稚拙さや未熟さを問い直させるもの、理解が得られても社会的制約によって叶えられない事柄

等、さまざまである。このように実際の社会の中で切磋琢磨されることで、生徒達は、実践的問題解決スキル、社会参画スキルを身につけると同時に、主体的に生きる意欲や自己効力感、社会での役立ち感や自らの役割意識を育むことにつながっていく。これは学校内だけでは、決して成し得ない学びである。植田実践では、ESDで求められるこれら二つのプロセスを丁寧に形成し、そのプロセスで、食品ロスという問題を生徒が自分の問題として認識している。それゆえ、それぞれの立場から学びを社会に結びつけようとする主体的な行動へと結びついていると思われ、この実践の後は、生徒の学びに向かう姿勢に大きな変化がみられていることだろう。

参考・引用文献

- 1) 国立教育政策研究所教育課程研究センター. (平成 22 年). 学校における持続可能な発展のための教育 (ESD) に関する研究 [中間報告書].
- 2) 国立教育政策研究所教育課程研究センター. (平成 24 年). 学校における持続可能な発展のための教育 (ESD) に関する研究 [最終報告書].